



美術・工芸部門 出展

「納得いくまで描きたい」

昨年は、県高校美術展でも入賞せず、悔しい思いをした伊東。文化部のインターハイ「全国総文祭」の美術・工芸部門の会場だった宮城県美術館で、全国のレベルの高い作品を目の当たりにした。「ここに自分の作品も飾りたい」。大きく刺激を受けた伊東は、その年の秋から総文祭出展を目標に制作を始めた。イメージ通りの表現ができず何度も描き直す日々。全く筆が進まない日もあった。「悩んでも、逃げずにクリアしていくのが彼女の強み」と顧問の阿部先生は振り返る。4カ月かけ、描き進めてきた伊東の油絵は完成した。作品のタイトルは「日常」。生活の中で、靴を取り出す無意識の動作に、あえて意識を向けた。

県展では優秀賞を受賞、念願の総文祭に出展する10点に選ばれた。「素直にうれしかった。家族や友達が喜んでくれたことがさらにうれしかった」。作品の完成を決めるのは自分次第。「どこまで描くか悩むことも多いが、納得できるところまで描きたい」。伊東はこれからも絵と向き合い続ける。



出展作品：「日常」

伊東雪奈 佐沼高3年



男子80斤ハードル 決勝進出

「誰よりも速くゴールへ」

「目標は、県大会出場だった」とテンポよく話す佐々木。ハードルを始めたのは、市大会の1カ月前。母親が学生時代にハードルをしていたこともあって、自ら80斤ハードルへの出場を志願した。学校では、スタート位置から1台目のハードルまでの距離を、スピードを加速させながら歩幅を合わせる練習を繰り返した。

「常に体を低くして、速く跳ぶことを意識した」。持ち前の瞬発力とリズミカルなスピードで記録を伸ばし、市、県大会共に優勝、全国出場を果たす。

目標以上のステージに立った全国大会。気持ちを奮い立たせた佐々木は、予選で自己ベストの13秒01をマークしたが、決勝でゴール手前のハードル3台を残し転倒してしまう。しかし、「決勝では自分の力が出せなかったけど、全力で走り切った」と雲一つない青空のようにほほ笑む。「中学に行ったら陸上部に入部し、ハードルがしたい」。専門的な技術を学び、誰よりも速くゴールしたいと新たな目標を決めた佐々木は、さらなる高みを目指す。

佐々木琉偉 南方小6年

夏に挑む

Zoom Up Tome 2018 Special

「努力の継続は大きな力」

創部4年目で歴史の浅い商業部が、県大会団体の部で強豪・大河原商業高を抑えて優勝。初となる全国大会への扉を開いた。さらに、個人の部では1位、2位を佐々木と千葉が独占した。大会は配られた原稿を10分間の制限時間内に打ち込み、速さと正確性を競うもの。県大会で優勝すると全国大会、4位までは東北大会の出場資格が与えられる。

「全国大会の成績は55校中46位。創部したところの成績は、県内でも下から数えた方が早かった。それが、昨年は東北大会に出場するまでになっていた。休まずに部活に来たことが上達した要因」と顧問の宇都宮先生は分析する。

「東北大会に2年連続で出場すること」が合言葉だったという5人。全国大会に行くことになるとは思っていなかった。部長の千葉は「優勝は、もちろんうれしかった。でもそれ以上に、引退が伸びて、このメンバーで少しでも長く部活を続けられたことがうれしかった」と笑う。努力の継続が大きな力となり、商業部に新たな歴史を刻んだ。



全国高等学校ワープロ競技大会出場
登米総合産業高商業部
(写真後左から、千葉啓加・佐々木綾乃・衣川未里
前左から、白石アンナ・高橋凜花(全員3年))

「チーム力で上位目指す」

県大会個人の部で1位から5位までを独占し、3年連続で団体優勝を果たした北方小自転車クラブ。毎日違う目標を立て、堅実に練習を積み重ねてきた成果が、実力と自信につながった。

大会は、交通規則や自転車の安全な乗り方などの問題を解く学科、信号がある交差点の右左折、横断歩道の渡り方などを審査する安全走行テスト、S字走行やジグザグ走行などの熟練度をチェックする技能走行テストの実技で競う。全国大会には、47チーム188人が参加。会場を埋め尽くした参加者と観客数に戸惑う5人だったが、「大会が始まれば、いつもどおり集中できた」と6年の佐々木(歩)と5年の千葉は、実技で満点を取る。しかし、総得点で振るわず、団体の結果は34位に終わった。

「昨年よりいい成績が出せた。後輩は来年もチャンスがあるので、頑張ってもらいたい」と話す佐々木(歩)と安藤。佐々木(杏)、千葉、遊佐は口をそろえ「学科が課題。チーム全員でいい点数を取り、来年はさらに上位入賞を狙う」と意気込みを見せた。



交通安全子供自転車全国大会出場
北方小自転車クラブ
(写真左から、佐々木歩果(6年)・佐々木杏理(5年)・千葉大冨(5年)・安藤まりも(6年)・遊佐祥太郎(5年))